

かつて民進党に所属していた議員らがこのほど、政策提言をまとめた著書「リベラルは死なない」（朝日新聞出版）を出版した。編集に携わったのは、慶大の井手英策教授。民進党代表を務めた前原誠司・元外相のブレーンの存在で、同党出身の議員たちが政策を議論する中で、書籍化構想が持ち上がった。

現在の所属政党で見ると、立憲民主党と国民民主党の双方から参加している。このため、井手氏は「（民進党から）分かれた人たちが一緒に本を書くん

リベラルは死なず

て、立場上まぎらないですか」と疑問を投げかけたところ、返ってきた答えは「党の違いや立場なんて、ささいなこと」だったという。

永田町の現実を見ると、立憲民主党と国民民主党の亀裂は深刻だ。2019年度予算案の参院審議でも、両党間の主導権争いが目立った。立憲民主党が参院予算委員会で予算案の締めくくり質疑を行うことを与党と合意すれば、国民民主党が「早すぎる」と批判する。国民民主党

政なび

が参院の野党第1会派の地位を守ろうと、離党届を提出した参院議員の処分を先送りすれば、立憲民主党が「異常だ」とかみつく。両党幹部の応酬に、若手議員からは「私たちのレベルでは、協力できているのに」とため息が漏れる。

参院選に向けた野党間の候補者調整が本格化する中で、各党の駆け引きも激しさを増す。書籍のよつに、党の違いを乗り越え、結果を出すことが出来るだろうか。（平田舞）